1.誠実さと真面目さを合わせて絵に描いたような一志さん。 2.椎茸を栽培するビニールハウス。
3.ビニールハウスの前後に並ぶ杉林。先祖代々のこの杉林がつくる日陰が椎茸にとって最適な光環境を生み出している。

今年、全国から集まった1000点の中で最高賞に選ばれた25点の椎茸。その中に、栽培者「高久（たかく）香織」の名があった。福島県西会津町で椎茸栽培を行う彼女は、二級障がい者に認定されている。病で左目が失明し、右目も0.1ほどの視力しかない。「どうしても香織の名を残したかった」と語る夫・一志（かずし）さん（47）と香織さん（47）。二人が椎茸づくりを始め、日本一に輝くまでの11年の足跡を辿る。

手術に次ぐ手術

二人は西会津町の中学校で出会った。香織さんは養護教諭として、一志さんは社会科の先生として赴任し、じきに結婚。翌年、一志さんの転職に合わせて隣町に引っ越した。香織さんは町の健康管理センターで保健師として働いていた。結婚して5年目の春、健康診断で香織さんの目に異常が見

猪苗代湖、会津盆地を流れて新潟を通って日本海に流れ込む阿賀川。
高久さんの椎茸は地下十数メートルから引き上げた湧き水と阿賀川がつくる川霧を浴びて育つ。

つかった。左目が歪んで見えるようになり、車の運転も難しくなっていた。2泊3日で手術を受けたが、2週間後の術後検査に行くと眼が手術前の状態に戻りつつあることが判明した。3歳のとき、先天性白内障のために受けた左目の手術が原因だった。30年の時を経てその合併症が発症したのだ。

香織さんは再び入院した。眼球は炎症を起こし、中に水が溜まっていた。手術を受けるとその影響で眼球を満たす液体をつくる穴が塞がれてしまい、眼球が萎縮していった。さらに網膜剥離を併発し、その治療によって角膜混濁という新たな合併症が発症した。2ヶ月間の入院生活で3回もの大きな手術を受けた。退院後も通院は続き、1年間にわたって手術を繰り返したが、彼女の眼は良くなるどころか悪くなっていった。視野が歪むだけだった左目は今や萎縮し、光を感じることしかできない。0.7あった右目の視力も0.1まで落ち込んだ。「治療、回復、不安、絶望の繰り返しでした」と一志さんは当時を振り返る。そしてついに、「これ以上の手術は危ない」と医師に告げられた。眼は脳の近くにあるため、これ以上メスを入れると脳にも影響を及ぼしかねなかった。一志さんは「目は代わりになれる人がいる。でも、命の代わりはない」とすぐに治療を諦め、「私が香織の目になる」と決めた。自分に何かあったときのために、アイバンクの登録も済ませてある。小さくなってしまった左目、わずかしか開かないまぶた。香織さんの顔は変わり果ててしまった。「目の働きがなくなってしまったとしても、手術しなければ顔の一部としての役割は果たせていたと思うと……。女性だし、やっぱりショックでした」と、香織さんは目を伏せた。見た目だけでも眼を元の状態に戻せないかと訴えたが、大きな手術が必要で、それはあまりにも危険だった。

一方の一志さんは、親戚から請